

# いしかわ自然史

87号

発行日  
2022年12月25日

▲ 2021年11月12日03時31分 スプライト 加賀市沖50km上空80km大きさ20km (推定)  
下部からの雷光で一瞬夜空が明るくなっている (地図中のIS5は観測点名)

## 加賀市沖上空のスプライト

石川県立大聖寺高等学校 米口 一彦

スプライトは高高度放電発光現象の一つで、雷雲の上空高度50~80kmの中間圏での瞬間的な発光現象である。スプライト (sprite:妖精) の名は、瞬間的 (0.01~0.1秒間) に現れ消える赤色の姿に由来するといわれる。1989年米国で偶然ビデオ撮影されてから本格的な研究が始まり、宇宙ステーションや人工衛星など宇宙からの観測も進められたが、発生メカニズムの全貌はいまだ解明されていないようである。

日本では1999年ころ、能登半島上空のスプライトが観測されている (福西浩氏)。以来、日本海側の冬季雷で多く発生するとされたが、最近は夏季の北関東や太平洋など、季節や場所を問わない感がある。スプライトは発光時間が非常に短く、いつ落ちるかかわからない落雷が引き金となっているため、肉眼で観測することは難しい。そこでビデオ観測が用いられる。私もパソコンと高感度カメラ (ソニー a7sの4K動画モード) を使ったビデオ観測である。パソコンでは自動観測ソフト UFOCaptureHD2 (SonotaCo氏作成) によって、

発光前後の2秒間が動画ファイルとして保存される。あとはこのファイルを確認すればよい。このような手軽さもあり、以前は全国規模の高校生の観測コンソーシアムがあった。実は、その活動がきっかけで個人的にも観測を始めた。(流星観測も兼ねている)

当初は、自宅が日本海側なのですぐにでも観測できると思った。しかしスプライトは雷雲の上で発生するため、冬はほとんど雲天の下となりなかなか観測できなかった。それでも雷雲が石川県沖の遠くで、かつ陸地付近が晴れているときにスプライトが観測できるようになった。ただ遠距離のスプライトなら晴天率の高い太平洋側からよく観測されている。そこで日本海側であることを生かし、明るく細部まで撮れる近距離スプライトを狙うことにした。ラッキーなことに、上の画像はそのセッティングをしてすぐに撮れたものである。仰角60度以上とこれまでで最も近距離であった。今後もスプライト発生メカニズムのヒントになる映像を撮ることを夢見て、観測を続けたい。

# 縄文早期漆文化とウルシ植林地植生

石川県自然史センター 高木 政喜

石川県の漆文化は古くから伝統ある輪島塗、山中塗、金沢漆器と三大産地があって、深く生活の中に広がり浸透している。我が家にも漆黒のうるし塗の菓子皿が昔から1枚あった。何回も漆を重ね塗ったもので子どもながら「美」を感じた菓子皿であった。図柄はなく、大きくなったら誰かに絵を描いてもらったら、という母の言葉が思い出される。

私たちの身の周りにある美しい漆器は、いつ頃からつくられていたのだろうか。正直なところ、あまり考えたことがなかった。

1984年に福井県若狭町の鳥浜貝塚遺跡から椀・皿・鉢などの漆器の木胎容器、弓・太刀などの武器、櫛・腕輪・耳飾り・首飾りなどの装身具が多岐にわたって漆を施された出土品として発掘された。この縄文時代草創期の漆文化の発見には驚いた。さらに出土した木片を2011年に東北大学（鈴木三男、元金沢大学）が調査したところ、およそ1万2600年前のウルシであると同定された。この事は、ウルシが他の国、他の地域から持ち込まれたのではなく、日本国内に元々自生していたのではないかという可能性も考えられるもので、植物に関心の高い人たちには驚きであった。

石川県でも縄文時代前期の七尾市三引遺跡（7000～6500年前）から赤色漆塗堅櫛、金沢市米泉遺跡（縄文後期～晩期4400～2400年前）から漆を用いた腕輪、珠洲市の真脇遺跡（縄文前期～晩期）などからも漆器が出土している。このように新たに考えてみると、少なくとも9000年前の縄文時代早期には漆の利用が開始されていることが分かってきた。今のところ鳥浜貝塚遺跡からの出土品は世界最古である（四柳嘉章、2009）。

漆塗が盛んになるのは、縄文前期（7000～5400年前）段階からだそうであるが、この頃は地球規模の温暖化が進み、遺跡から発掘されるスダジイ、ウラジロガシ、カヤ、トチノキ、オニグルミなどの多様な果実を当時の人々は食用にしており、照葉樹林の生態系サービスを十分享受していたものと思われる。縄文時代の人々の生活は意外と活発に野外に出て活動



漆塗櫛

(材:ヤブツバキ、鳥浜貝塚遺跡)

し、漆器を使って食事をする、漆の装飾品を身に着けるなどの優雅な生活が想像される。

現在、石川県のウルシ (*Toxicodendron vernicifluum*) は、どのように分布しているかについては不明である。これはウルシが帰化種であるため分布調査が行われていないことによる。

また、国内で使用されているウルシのうち、国内産はわずか5%足らずで、他は安い中国産で占められている。国内の主産地は岩手県で、その他茨木県、栃木県、そして石川県は微々たる量の生産である。

現在、輪島市門前町、加賀市山中町でウルシを植林してウルシの生産量を高めようと漆再生プロジェクトが進められている。

平成21年「加賀市山中温泉地区の植生（加賀市、2009）」の調査の折、ウルシ植林地があり、植生調査を行なったので、その概要を記述する。

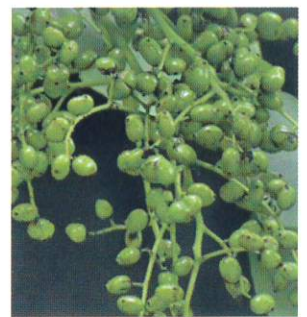
## ◇ウルシ植林 (*Rhus verniciflua* plantation)

ウルシ植林は、山斜面下の日当りのよい平地に立地しており、低木層と草本層の2層から成り立っている。低木層の植生率は10%余りと小さく、ウルシは、高さは2.5m余りで低い。ウルシは、成木では高さ7～10mまで成長するので、植林してまだ時間が経過していない状態のものと考えられる。低木層にはクマイチゴ、タニウツギ、イヌザンショウ、ヤマウコギなどの先駆性植物で構成されているが、その総合優占度・群度は小さい。

草本層の優占種はヨモギであるが、やはりその総合優占度・群度は2・2で大きくはない。ほかにススキ、ヤブマメ、メマツヨイグサ、ヤハズソウ、ママコノシリヌグイ、ノコンギクなど路傍、荒れ地に生育する多様な植物が見られる。今後の植林の成長に期待したいものである。

最後に輪島市門前町栃木集落にある巨樹ウルシについて書き留めておきたい。

栃木集落は、門前町を流れる八ヶ川にそそぐ栃木川の中流域の峡谷にある。そこに幹周204cm、樹高18m（筆者測定）のウルシの巨樹が見られる。おそらく県内で最大であろうと思われる。



緑の若い果実を付けているウルシ(栃木集落)

# 石川県で見られるハンミョウたち ～トウキョウヒメハンミョウの発見～

石川県立自然史資料館 嶋田 敬介

ハンミョウ(斑猫)は、甲虫目ハンミョウ科に分類される昆虫で、日本では25種類が知られています。石川県は、本州で最もハンミョウの種類が多い県の一つとして知られ、これまで12種類の生息が確認されていました。しかし、最近、トウキョウヒメハンミョウ *Cylindera (Ifasina) kaleea yedoensis* (Kano, 1933) が金沢市内で発見され、石川県で見られるハンミョウは13種類になりました(表1)。

トウキョウヒメハンミョウは小型のハンミョウで、成虫の体長は1cm弱しかありません。また、体の色は茶褐色で目立った模様もなく、とても地味な外見をしています。成虫も幼虫も肉食性で、成虫は主に地面の上におり、歩行や飛翔を繰り返して素早く移動し、獲物(小さな昆虫など)を見つけると捕食します。幼虫は、地中に一本の縦穴を掘り、地表付近の入口で待ち伏せて、近くを通る獲物を食べて成長します。成虫が出現するのは6～9月で、交尾・産卵が行われるのは7～8月頃です。生息地は山間部というより都市部で、人家の庭や公園、神社の境内や墓地、市街地に近い雑木林の林床など、日があまり当たらない湿気のある場所で多く見られます。また、街灯や夜間照明などの灯火に飛来するので、その近くで成虫が目撃されることもあります(図1)。

本種は、台湾・中国・日本に分布しており、それぞれ3つの亜種として区別されています(堀, 2019)。国内では、東京の渋谷で最初に採集され、鹿野忠雄氏によって亜種として記載されました(1933年)。1980年代までは、関東地方(東京・神奈川・埼玉・千葉・茨城)や九州の一部(福岡)だけで確認されており、その不自然な分布などから、国外(台湾など)からやって来た外来種と考えられています。その後、分布が広がり、群馬・栃木・山梨・静岡・愛知・岐阜・三重・大阪・和歌山・富山・福井・岡山・山口・愛媛・長崎・大分・宮崎など、現在では国内の様々な地域で確認されています。

石川県では、2020年と2021年の7月に、金沢市野田山で成虫が採集され、これが県初記録になりました。発見されたのは墓地公園で、園内にある墓地やその周辺など、草があまり生えていない場所で成虫が見られ、最大で200頭以上の個体が確認されました(八神, 2021)。2020年と2021年に連続して確認されていることから、この場所に既に定着していると考えられます。

幼虫は、表土や植木、鉢植えの土などに紛れて運ばれる可能性があることから、本種の分布拡大

は人為的要因によるものが多いと考えられます(堀, 2019)。本種は、茶色の地味な外見をしているため見つかりにくく、サイズも小さいことから、注意深く観察しないと他の昆虫(アリやハエなど)と見間違えてしまうかもしれません。したがって、まだ報告されていないだけで、石川県内で他に発生・定着している場所がある可能性があります。もし、トウキョウヒメハンミョウらしき昆虫を見かけたら、石川県立自然史資料館までご連絡ください。

表1 石川県で見られるハンミョウ(堀, 2019を基に作成)

番号	和名(上段)・学名(下段)
1	ミヤマハンミョウ <i>Cicindela (Cicindela) sachalinensis niohozana</i> Bates, 1883
2	アイヌハンミョウ <i>Cicindela (Cicindela) gemmata aino</i> Lewis, 1891
3	コニワハンミョウ <i>Cicindela (Cicindela) transbaicalica japonensis</i> Chaudoir, 1863
4	ニワハンミョウ <i>Cicindela (Cicindela) japana</i> Motschulsky, 1857
5	ナミハンミョウ <i>Sophiodela japonica</i> (Thunberg, 1781)
6	ハラビロハンミョウ <i>Calomera angulata niponensis</i> (Bates, 1883)
7	カワラハンミョウ <i>Chaetodera laetescrpta circumpectula</i> (W. Horn, 1938)
8	マガタマハンミョウ <i>Cylindera (Apterodela) ovipennis</i> (Bates, 1883)
9	ホソハンミョウ <i>Cylindera (Cylindera) gracilis</i> (Pallas, 1777)
10	トウキョウヒメハンミョウ <i>Cylindera (Ifasina) kaleea yedoensis</i> (Kano, 1933)
11	エリザハンミョウ <i>Cylindera (Eugrapha) elisae</i> (Motschulsky, 1859)
12	イカリモンハンミョウ <i>Abroschelis anchoralis punctatissima</i> (Schaum, 1863)
13	コハンミョウ <i>Myriochila (Myriochila) specularis</i> (Chaudoir, 1865)



図1 灯火に飛来したトウキョウヒメハンミョウ

# 令和4年度のいしかわ自然史塾講座の概要と成果

石川県自然史センター 高木 政喜

令和4年度「いしかわ自然史塾～自然史環境調査人材養成プロジェクト～」講座が終了したのでその概要と成果について報告したい。

この講座は自然史センターが主催し、今年度は七尾市を主会場に6月4日(土)から9月3日(土)までの期間に6回開講し、受講者の募集は、珠洲市、輪島市はじめ能登半島一円の広い地域から植物に関心の高い人たちを募り、開講されたものである。

講座目的は、講座名からも推察されるように現在、自然環境に関する人材、とくに植生調査、レッドデータブックに係る人材、学校・地域における植物観察会講師、圃場整備事前生物調査(法律で決められている)の植物調査員等に関して全く人材がない現状にあり、開講したものである。具体的には、石川県民114万人中で自由に調査等に加わる人材は、高齢の方を除くと県内で10人程度であり、国・県・市の行政事業にも支障を来す危機的な状況になっている。このような切迫した人材不足の状況に鑑みて石川県自然史センターが独立行政法人環境再生保全機構の地球環境基金部から助成金を得て開講したものである。

講座内容としては、地域の自然環境を植物の視点に立って生態系及び種の多様性について知り、その中に日常目にして植物の営みのなかに新しい科学的な仕組みを幾分でも理解できればとプログラムを立案した。

日程・研修内容・講師・野外実習地等について具体的に記述する。なお、研修時間は各回9:00～16:00とし、研修は、午前:講義、午後:野外実習とした。日程は次の通りである。

第1回:6月4日、研修内容:

午前:講義、「植物標本の意義・重要性及び標本台紙・ラベル・アノテーションの書き方」

午後:「アラビアゴムでのり紙作製」

講師:県立自然史博物館副館長 中野真理子

第2回6月11日、研修内容:

午前:講義、「ドローン撮影による植生域の図化手順」講師:小門律樹(東洋設計株式会社)

午後:「図化された植生域写真をもとにした海岸群落組成調査」(実習:line法)実習地:海士岬海岸(志賀町)

講師:高木政喜(石川県自然史センター)

第3回7月2日、研修内容:

午前:講義、「タブノキ林(照葉樹林)の分布と環境要因及びその階層構造」講師:中村長嗣

(石川植物の会)

午後:タブノキ林の構成種の観察と同定実習。実習地:唐島神社(七尾市中島町)講師:中村長嗣・高木政喜

第4回7月16日、研修内容:

午前:講義、「木本植物の観察-シュート・葉の形態・長枝と短枝・分枝-」

午後:「植物標本の作製-のり紙の切断・台紙の配置と貼付の仕方-」講師:西井武秀(金沢大学ジュニアドクター育成塾事務局)

第5回7月30日、研修内容:

午前:講義、「能登半島の離島の植生」-舢倉島・七ツ島の植生を中心として-

午後:「七尾北湾青島の植物相の調査・実習」講師:高木政喜(石川県自然史センター)

第6回9月3日、研修内容:

午前:講義、「ブナ林(夏緑樹林)の分布とその階層構造」

午後:「ブナ林の構成種の観察と同定(実習地:石動山(中能登町)」講師:佐藤卓(日本海植物研究所所長)

以上、講座の概要について記載したが、この講座を受講したからすぐに自然環境調査等が行えるものではない。まず豊かな地域の自然環境を知り、その重要性について気づき、植物の世界から学ぶことを主眼とした。受講者からは、日ごろ見ていたみどりの世界に入り込み、今まで気づかなかった葉の葉脈にも植物が歩んできた進化の過程が刻まれていることに思いを新たにしたいとの話を聞いた。講座開催の成果の一端を知ることができ、さらに各人のスキルの向上に期待したいと思っている。



第3回講座、中島町唐島神社叢林を背景に

## 2022年度 いしかわ自然史塾を受講して

垣内 信一

日頃から家の周辺の植物に興味を持ち、時々行われる植物観察会などに参加しているが、植物の名前を知るといものがほとんどで、なかなか植物の生態まで知る機会がない。現在、身近な場所（能登地区）に育っている植物がなぜそこに存在するのか大変興味がある。そんな時、自然史センターの高木先生より声かけがあり、現地研修が多く、内容が自分の知りたいことが含まれているようなので、思い切って参加申し込みをした。（長い時間椅子に座って講義を受けることは少し不安があった）。以下、自分が特に楽しかった講座について思うままの感想です。

### タブノキ林(照葉樹林)の分布、環境要因とその階層構造

午前中はタブノキ林の成立について講義があり、午後からは七尾市中島町の唐島神社社叢林の観察。七尾西湾の突出した場所にあり、海岸に接した場所にありながら、タブノキ、ヤブツバキを優占種とし、一般的なスダジイを含まない暖地海岸性常緑広葉樹林としていることが県内では珍しいとのことだった。なぜスダジイがないのか知りたいところだったがよくわからないらしい。

### 木本植物の形態観察

七尾市田鶴浜町の赤蔵山での現地実習。赤蔵山の植物の特異性について①北限の植物と南限の植物が混在する（シダ植物）、②県内唯一の樹木（カゴノキ、イヌガシ）が生育、③低山ブナが生育していること、これらは自然に分布したものや人為的なものもあるかもしれないとのことだった。木本の形態観察のポイントを教えてもらう。常緑樹の今年のシュート、1年前のシュートなどの枝の色や葉の付き方から葉の寿命を知る方法、植物の長枝や短枝の葉の付く位置の利点や実のなり方、分枝による光の取り入れ方、マメ科植物の複葉の光エネルギーの利用法、つる植物の戦略、日の当たり方による葉の質感などを学ぶ。「自分の目」を植物のどこにつけるかが鍵、注意しながらもっと調べてみると面白くなり、植物たちが生きていくためや子孫を残すために何が都合が良いのか分かってくる。その場所に生育する植物の観察は視点を決め、繰り返し眺めることが必要とわかった。

### 穴水町の無人島「青島」の観察

穴水町新崎地区集会所で、輪島市の離島七ツ島と舳倉島の植生について講義を受ける。その後、船で青島に移動。タブノキやモチノキが茂る照葉樹林が残っているが、かつて人が住み、今では無

人になった場所では、雑多な植物が生い茂り歩くこともできない。この中に入ってみると、暑さのため熱中症になるかもしれないと思うほどきつかった。いったん開発すると植生の修復が大変なことだと良くわかる。これから植生がどんな変化をしていくのか知るにはよい場所かもしれない。

### ブナ林(夏緑樹林)の分布、環境要因とその階層構造

ブナ属の先祖は熱帯産地の常緑樹と考えられる。虫媒花から風媒花に、同じドングリでも発芽する時の子葉の位置の違い、果実の栄養がミズナラの2倍（大形動物の餌）、日本海側に発達するブナは純林を作る、日本海側気候とブナの適応などについての講義を受けた。その後、中能登町の石動山に移動。ヒメアオキなどの日本海要素の特徴はどうして起きるのか、石動山のブナ林の林床の特徴などを教えてもらう。能登地区に点在するブナ林は（低地ブナ？）加賀に存在するブナと同じものなのかどうか？講師の方は遺伝子など調べないとはっきりわからないのではないかとのことだった。

### 受講を終えて

長い講義（やはりかなり疲れた）や植物の分類・同定だけでなく、基本的な植物の標本作り、最初に望んだ植物たちの生活について調べる方法や機会があり、今後に役立てようと思う。ただ漠然と景色を見ているような植物観察ではだめで、何が目的でどこに目を付けるかによって少しずつ知ることができるのだとわかった。

最後に、最近生物多様性についてよく触れられているが、身近に多くみられる帰化植物の存在が周りの環境に与える影響や生態系の多様性についての講義もあればよかったと思う。内容豊富な講座を計画して下さって大変ありがとうございました。



霧に包まれたブナ林(石動山)

# いしかわ自然史塾に参加して

坂尻 忠秀

以前お世話になった先輩から誘われました。植物などに特に興味や関心を持っていただけではありません。年に1~2回白山などへ登ることがありますが、高山植物を見てニッコウキスゲ、ハクサンコザクラ、クロユリ・・・などはわかって、他の多くのものを「ミヤマシラネソウ」というカテゴリーの中に閉じ込めてしまっています。普段畑や道沿いに見かける植物はやっかいで忍耐を要する草取りの対象であったり、草刈り機による除草の対象であったりしています。自分が名前を知らない植物、生活にあまり関係しない植物は基本的には「雑草」としかみていないありさまで、はたして自分は参加してもいいのかしらと思いました。一方、妻は退職後に能登の山野草の会に加入して例会などにいそいそと出かけているので、この話をしたら参加したいということなので、会場が少し遠いこともあって私は妻の送迎の運転手として参加することにしました。



赤蔵山に自生するカゴノキ

6月4日から9月3日までの6回にわたって行われた内容は以下のように多岐にわたり何十年か振りに学生に戻ったような気がしました。講師が足繫く現地へ通い、観察し、記録し、整理・分類して築きあげられた体系を垣間見ることができました。さらに野外実習に選ばれた実習地は、能登に生まれ育った私も初めて足を踏み入れるところが多く、丁寧な説明を聞きながら歩き、観察し、記録を取りなどすることは得難い体験でした。実習地での植物がそれぞれの生育に適した成長戦略ともいえる方法で生きていることを知って感動しました。光、水、土壌さらには空気や風などを巧みに利用して、植物が生きていくことも大変なんだなあと思ったりもしました。ただ、私には植物に関して知らないことが多すぎて理解できないことがあったり、植物の細部の違いをもとに見分けることが大変難しいなと思いました。

## 第1回 講義

(植物標本の意義・重要性、標本台紙・ラベル)  
実習(のり紙の作成)

## 第2回 講義

(ドローン撮影による植生図)実習  
(海士岬海岸での群落組成の調査、ドローン飛行)

## 第3回 講義

(タブノキ林の分布・環境要因・階層構造)実習  
(唐島神社のタブノキ林)

## 第4回 講義

(木本植物の形態観察)実習  
(赤蔵山一シュート・葉の形態・長枝と短枝・分枝一、植物標本の作製)

## 第5回 講義

(能登半島の離島の植生一舢倉島・七ツ島一)実習  
(青島の植物相の調査)

## 第6回 講義

(ブナ林の分布・環境要因・階層構造)実習  
(石動山のブナ林の観察と同定)



植物標本作成作業

真夏の暑さがこたえる日もありましたが6回すべてに参加して、「石川県自然史調査員認定証」をいただきました。また手元には新聞紙を毎日取り換えて乾燥し、台紙に自分で作ったのり紙で固定してラベルもつけた植物標本もあります。ありがとうございました。

この講座では毎回の準備や運営・実施に事務局の先生方が大変尽力されておりました。改めて感謝とお礼を申し上げます。



「世界にたった一つの私の植物標本」発表会

# 洞スギ、沢スギ、県木タテヤマスギ巨木と出会う

西岡 登・唐 祺東

## 観察会の概要

今回はタテヤマスギ（変種アシウスギ）巨木の観察を主目的としながらも、日本屈指の急流片貝川と県最北の一級河川黒部川が作る黒部川扇状地湧水群という、水に関する観察会でもあった。

10時、魚津市の片貝川上流の南又谷右岸（標高500～700m）に到着。片貝川源流部の山岳から土石流などで運ばれた花崗岩質の巨岩を抱く、樹齢500年以上のスギ巨木群（洞スギ）を観る。



左上写真は北東端にある最大の洞スギ。幹周1560cm、積雪により枝が下がり、複雑な樹形に。

また、峡谷の多雨多湿環境により岩面には密生したコケ類やオオフジシダ等の岩上植物群落が形成されている（左中写真）。



11時、バスに乗り込み、同市の東山円筒分水槽を見学。その後、入善町の黒部川扇状地末端部、海岸近くの豊富な湧水地に立地する杉沢に到着。



12時、昼食を沢スギ自然館で摂った後、杉沢の林内に入る（左下写真）。沢スギは根元からの萌芽性が強く、伏条性があり、枝の発根力が良いという特徴がある。また、湧水地の礫の中で育っている

ので根が浅く、土壤養分が少ないこともあり、大きくなりにくいスギである。湧水により冬場は積雪が少なく暖かいので、林床にはカラタチバナやオモト、オオキジノオシダなどの暖地性植物（北限）が生育している。

14時、黒部市生地の黒部漁港に到着。生地は全国名水百選にも選ばれる清水の里であり、地区内には18カ所の清水がある。内、11カ所は共同洗い場として町内等で管理されている。（右上写真 弘法の清水）

また、区域を流れる用水には清流に生育するバイカモが見られた。（西岡）

水と人々の生活について感じたこと

古今に亘り、人類は水と闘い、水と生きてきた。華夏の禹は洪水を治めて天下を統べ、回民の王は水を以って財力を示す。この日本にも円筒分水槽で水分け問題を解決した匠がいる（右中写真）。全国に現存する10数個の一つを魚津で見て、その巧みに驚いた。



黒部市生地は水によって育まれた街である。漁港を中心に長閑な街並みがあり、「魚の駅」で採れたての海産物が直売されている。町中いたるところに清水が湧き、水を汲む現地の方の姿もあった。杉沢を潤した黒部川の伏流水が、ここでは市民の生活を潤しているのを見ると、人間が天然物たる水にどれほど助けられているか実感できる。歴史の大部分の時間において、水辺は森林と並び人と自然が互いに触れ合い、人の方が恵みを授かる場であったと、改めて気づかされた。

農地で作業していた高齢女性が、観察会参加者が澄んだ水路に揺蕩う水草に見入る姿を見て、軽やかに農具を持ってその一筋を掬い上げ、「これはバイカモ（右下写真）ですねえ、見終わったらポイしてください。」と声をかけてくれた。その姿に古き良き農山漁村の営みが想起され、現代に慣れた私には新鮮だった。（唐）



農地で作業していた高齢女性が、観察会参加者が澄んだ水路に揺蕩う水草に見入る姿を見て、軽やかに農具を持ってその一筋を掬い上げ、「これはバイカモ（右下写真）ですねえ、見終わったらポイしてください。」と声をかけてくれた。その姿に古き良き農山漁村の営みが想起され、現代に慣れた私には新鮮だった。（唐）



参加者の皆さん(洞スギにて)

## 自然史エッセイ

### 石川県立自然史資料館の近況

石川県立自然史資料館・館長  
中村 浩二



私は2017年4月に館長職を拝命し、はや6年目です。当館は、いしかわの自然(動物、植物、地学など)を学び・体験し・未来に伝える参加型ミュージアムです。2006年に開館し、17年目に入りました。残念ながら、まだ県民にあまり知られておらず、来館者も多くありません。どうすれば当館を、地域の自然や環境に関心をもつ、県民(子どもから大人、シニアまで)が、何度も来たくなる人気スポットにできるのか? 観察、実験、野外調査などをもっと工夫できないか、と思いをめぐらせてきました。当館は、私とスタッフ10名(学芸員3名、美術職員1名、県教育委派遣の教員3名、事務スタッフ3名)だけの小ミュージアムですが、みなさまのニーズにそって「みんなでき、身近な自然史資料館」を目指しています。

館長として、新企画を立ち上げました。「自然史資料館オープンミュージアム」は、世界博物館の日(5.18)と国際生物多様性の日(5.22)に連携して館内総力をあげて5月に開催、県主催のイベント「いしかわの里山里海展」(8月)への参加、「いしかわ自然学校」や「森林公園」などとの連携や在野の研究者を招待しての特別企画展などです。

新県立図書館(7月開館)の2階に「自然史資料館コーナー」が設置され、常設展示(当館の使命と県民へのメッセージ「みんなで守り、未来へつなぐふるさとの自然」と企画展示(石川の豊かな自然と直面する課題)を実施しています。同時に「いしかわ自然図鑑」プロジェクトもスタートしました(詳細はニュースレター18参照)。このコーナーを当館と県の関連団体、大学、民間団体・個人と連携して活用します。

今後の取り組みの第1は、「いしかわレッドデータブック2030」(第4版)の刊行です。初版(2000)から第3版(昨年7月刊)まで当館は重要な役割を果たしてきました。第2は、環境省による佐渡で野生復帰したトキの本州への放鳥事業です。石川県と能登の自治体が応募し採択され、準備作業がはじまっています。両事業とも生物多様性を扱える人材養成とそのため専門組織(機関)が必要です。「当館抜きには進みません」、と言いたところですが、対応力は十分ではありません。当館の博物館機能向上のため、学芸員を中心に収蔵庫ワークショップ(館内)を昨年末から10回あまり開催し、今後さらに継続する予定です。

県庁が期待する当館の中期経営目標(2022~26年度)は、入館者数を5年間で7000人、館外事業(出前講座、野外観察会など)の参加者数を5年間で3200人に増やすことです(両方で1万人)。これはなかなかきびしい数値です。

当館が頑張るためには、自己点検(活動のモニタリングと自己評価)と外部評価が必要です。課題を知り、優先順位をつけ、実行することです。さしあたり来館者数、利用数(外部イベント参加者数など)、ホームページアクセス数の分析をはじめました。フェイスブック、ツイッターもはじめましたが、目立った成果はこれからです。当館ではコロナ禍に対応して、講演会、イベントなどをZoomでオンライン実施し、成果をあげています。

当館が一番頼りにしているのは、石川県自然史センターの団体会員、個人会員のみなさまです。最新の個人会員数は86名です(高木理事長の第33回総会報告、本誌86号参照)。センター入会案内では約150名です。これは数年前の数値でしょうが、減少が気になります。いっぽう団体会員は、26から28に増えています。活動や交流の活発度はどうでしょうか。

当館の活動状況はホームページをご覧ください(年2回のニュースレターもアップされています)。皆さまのご参加、コメントを歓迎します。今後ともよろしく願います。

## INFORMATION

### ■ 石川県立自然史資料館 企画展 草木染めの自然史

内容: 植物を用いて染める草木染め。古代から、人々はさまざまな植物が染料になることを見つけ、生活を彩ってきました。本展示では、伝統的な染料植物をはじめ、野山に生える多くの植物が草木染めに利用できることや草木染めの不思議を紹介します。



タマネギの皮で染めた布

期間: 2023年2月4日(土)~5月7日(日)  
9:00~17:00【入館は16:30まで】

場所: 石川県立自然史資料館 2F 企画展示室

会期中  
無休

入場  
無料

この他、企画展関連行事を予定しています。詳細は今後発行の自然史資料館の案内チラシ等広報物・HPをご覧ください。

石川県立自然史資料館 ホームページ  
<https://www.n-muse-ishikawa.or.jp/>  
石川県立自然史資料館 QRコード▶



発行/特定非営利活動法人石川県自然史センター 編集/いしかわ自然史編集委員会  
〒920-1147 金沢市銚子町リ441番地 (石川県立自然史資料館内) TEL.076-229-3403・3450